
あいたい。

A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あいたい。

【Nコード】

N0886Z

【作者名】

A

【あらすじ】

BLモノ。策士受け溺愛攻め×素直になれない受け。

幹也の言葉から逃げていた南はいつのまにか、惹かれていたことにも気付かない。心を奪われていたことにも気付かない。そんなとき、幹也は南との待ち合わせ付近で……。

すなおになれない。(前書き)

BLモノです。

すなおになれない。

僕には、一つ年下の幼なじみがいる。

「南！　ねえ、南！」

耳元で大音量で自分の名前を叫ばれて、起きない人間なんていないんだぞ。せっかく人がいい気持ちで寝ていたと言うのに。

僕は浅く息を吐いて机に突っ伏していた身体を持ち上げる。軽く右左にひねれば痛々しい骨がなる音が聞こえる。

「南ってば、みーなみー」

「うるさいなあ、何？」

あまりにも何度も呼んでくる為、自分よりも高い位置にあるその顔を見上げた。

・・・茶色いさらりとした髪をむしりとしてやりたい。咄嗟にそう思う。

相変わらずの整い顔に何度も溜め息を吐きすぎた。なんでこんなにもコイツの顔は綺麗なのか。女であって欲しいと望んだのは数えきれない。

肩にかからない程度の長い髪はストレート、撥ねる事も知らないんだろう。ただの高校生がこんな髪型だったら女子は「きもーい」などと言うだろうが、コイツは違う。女子は目を星よりも輝かせて見つめているのだ、もちろんコイツの事だ。

それにこの深い茶色い瞳に見つめられてうっとりしない女子はいないのだ。僕には全くもって理解が出来ないんだけど。

昔は・・・あんなに可愛かったのに。

素直で無邪気で無垢で、一つ上と言うだけの僕を純粹に慕っていて

くれて。おにいちやあーん、と呼ばれる度に僕は思わずコイツに抱きついていた。あんまりにも可愛かったから。

けど年を重ねるごとにコイツはあっという間に僕の背を追い抜いて、大人に近づいていく。いつの間にか僕を慕うコイツ・・・綾瀬 幹也の姿はなかった。

ただ、それは容姿だけだったが。

僕が話しかけると、幹也は普段の大人びた空気を閉まって満面の笑みを浮かべる。真実嬉しいと語るその表情に悪い気はしない。

しかし

「お昼、行こうよ！ 屋上好きでしょ？」

南。

幹也はまるで愛でる様に僕の名前を呼ぶ、愛玩動物のようではなく、異性に向ける恋慕のようなもの。

そんな風な呼び方になりはじめたのは小学校の途中から、特に気にもとめなかったけど、中学校そして高校生になってから幹也は一層僕の名前を呼ぶ様になった。甘みを帯びた声で。

南、南。みなみ。

「ねっ、南」

「・・・うん」

「やった！」

純粹に喜ぶその姿だけだったら、僕は今だって幹也と普通に話せる。今もこれから。

けど、もし幹也が僕に心の内を見せつけて、言葉にすると言うのなら・・・僕は拒絶しなければいけないんだ。それが何よりも幹也の為だから。

「伊差川さん、お疲れさまです」

「おう、工藤もな」

くしゃりと撫で付ける大きな手。

バイト先の先輩、伊差川先輩は僕にとって兄のような人だった。面

倒見が良くて、責任感が強い、憧れの人なのだ。

頼もしく見える後ろ姿を眺めていると、手に掴んでいた携帯が震えて着信を伝える。

「うっ、わ．．．！」

手から滑り、床に落ちる寸前で携帯のストラップを掴む。ホッと安堵の息を漏らしながらメールを開く。

幹也からのメールで、開けばたった一言だけ「今、会いたい」とのこと。

いつもは長ったらしく絵文字や顔文字を使うはずのメールなのに、珍しいものだと思いを傾げる。

そして返信をどうしようかと唸る。別に時間はないことはないのだが、課題もある事だしテストも近づいているのだ。余裕はない。

携帯を凝視して立ちすくんでいる姿に横を通りかかった店長が不思議そうに見つめて来るから、携帯を持ったままお疲れさまでした、と声をかけて出て来る。

「まあ．．．少しだけなら」

既に真っ暗な外を見てから、携帯のボタンへと指をはしらせた。

「少しだけなら、良いよ」と返信する。それからしばらく携帯を握りしめて先の見えない道を歩く。もうすぐ行くと大きな道に出て来るから明るくなる。

人通りの少ない場所だが、同じ学校の生徒もほとんど通らない。そのわりに業績は良いらしく、バイトとしてここを見つけた時は慌てて電話した。

欲しいものがある訳ではないけど、いつか欲しくなった時に貯めておこうと考えている。

おっとりした声音の男の人が出て来て、高校生の身でバイトが出来るかと問えば喜んで言うてくれた。ちなみに今の店長その人だ。

（．．．．．ん．．．？）

いつもより幹也の返信が遅い。送って2分、3分ほどであんなにも長文が返ってくるのに。

思わず携帯の待ち受け画面を確認するが、もちろん受信はしていない。

だんだんと気持ちが焦ってくるのを感じる。携帯を意味なく何度も開いて、ゲームをしたりする。いつでも受信体勢だ。

結局その行為から5分後に待ち望んだ受信音。

「みきや・・・！」

何を、思ったのだろうか。

叫んだ後思わずハッとして周りを見渡す。いつもより焦っている自分が情けなくて、仕方がない。それも幹也の事で。

（僕は・・・別に、待ってない）

言い聞かせる様に何度も心の中で呟いてから、僕はそっと携帯を開いた。

すなおになれない。2

労働者の帰宅時間だからか人が多いのは仕方がない。

渋谷並に人が溢れている道を流れに逆らう様に僕は待ち合わせ場所に一心に歩き続けた。

なんだか不安なのだ。幹也が、違うようで。上手く言葉に表せないけどいつもより雰囲気、違う感じがしてならない。

遠くから待ち合わせの場所を認識したとき、僕の足は余裕を持った様に遅くなる。心は急いでいるにも関わらずだ。

眩しい輝きを放つビル。人の何十もの声。足音。甘ったるい匂い。様々なものが感覚を奪う。それが幹也と会う事を邪魔しているみたいだ。

――段々と内側から侵されているような、妙な感覚。幹也の支配の手がこちらを浸食しているようなのだ。

寒さにか、恐怖にか、得体の知れない何かに恐れている様に、条件反射で指が震える。ぎゅうつと拳を握りしめ違うと首を振る。

幹也のあの態度は、僕がいなきゃきつと生きていけない。

幹也には僕が必要なんだ。

「僕が・・・」

そのとき、ふと向こう側を見た。信号待ちで、車が行き交う目の前。合間合間から覗く向こう側へ、何かを捉えてもつとはつきり見ようと目を細めた。目を細めて、それを捉えた。

大きな石で思いっきり殴られたような衝撃だった。

何十メートルも先、高い身長に遠くからも目だつ明るい髪。見飽きた程の甘い表情。

その横には小さく可愛い女性がいた。

「え・・・？」

女性は細い腕を男の大きな腕にねっとりした様に絡め付けていた。

男・・・幹也も嫌がるそぶりがなかった。

言葉を失い、目を見開いてかたまつた。身体が動かない、いきなりの出来事に反応が出来ていない。信号がかわり、青になっても僕は足がすくみ動き出せなかった。

遠くからだんだんと幹也の姿が大きくなって近づいて来る。同時に隣の女性の姿もより鮮明となつて。

幹也は女性を見つめていて、女性も幹也を見つめている。

「み、きや・・・」

そう、呟いて僕は幹也が正面を向く寸前に、呪縛が解かれた様に咄嗟に引き返した。

喉の奥から込み上げてくるものを無理矢理飲み込みながら。

ぐちゃぐちゃになつた感情を抱えたまま、昨日は眠れる訳もなく今日は休もうかと思つた。

ただそれが幹也から逃げているような気もして、心配する家族を振り払つて重い体を持ち上げて学校に来た。

いつもと同じ様に机に突つ伏して、幹也が来るのを待つ。時間が酷くおそいのは気のせいだろうか。

チャイムが鳴つた瞬間、教室に入つて来た待ち望んだ幹也の気配に心がすうつと落ち着くのを感じる。

「南、なんで昨日いなかったの？」

いつもと変わらない声。

「母親に早く帰つて来てって言われてさ」

普段なら顔を上げるが全く眠れなかつたおかげで隈が出来ているのを知られたくなく伏せたまま。

動揺するのを隠す為に、眠れぬ夜を過ごしながら何度も考えた言い訳をゆっくりと言う。大丈夫、声に動揺の色はないはず。

「それなら言つてよ、寒い中待ってたんだよ・・・？」

「（嘘つき・・・）ああ、うんごめん」

「謝ってないでしょ。もう南ったら酷いじゃん」

お前の方が数倍も酷いじゃないか。

声には出来ず心の内で叫ぶ。

不意に後頭部に、幹也の手が優しく触れる。何故か慰める様に何度も何度も。髪の毛をかき回して。

幹也のその行為に思わず僕は、腕を振り払った。

「みなみ・・・」

「やめて、触らないで」

我儼な女のような台詞に、勝手に口から滑り出した言葉に僕が驚いた。

慌てて取り消そうと幹也の顔を見上げた。

「みき、ーーーー」

「ごめん、南」

幹也の顔は悲哀に満ちていて、今までなかったその表情。幹也の言葉がわからなかった。

何故謝るのか、僕が謝るはずなのに。

南は長い指先を伸ばして僕の目の下をそっと撫でてから、教室から出て行った。

すなおになれない。3

それからは幹也は僕と話す事はなくなった。

こちらにも来ない、休み時間も。メールもない。幹也に何かあったのかもしれない。

移動授業で理科室に向かうついでに、わざわざ遠回りして一年の幹也のクラスを教室のドアの窓から横目にのぞく。

窓際の一番後ろ。椅子の上で足を組んで遠くを見る幹也の横顔は冴え渡っていて、相変わらず綺麗だった。

少し離れた位置ではクラスの女子たちが見つめている。その様子が憎らしく思えて仕方がない。

いつもなら見たくもなかった幹也の顔もこんな時はずっと見ていたくなる。ほんの一瞬だけ垣間見えた幹也の表情、それが他人に見せるポーカーフフェイスだったことに僕は頬を緩ませた。

幹也が僕の名前を呼ばなくなって、二週間。

胸の奥がつかえていて、取り除けないのがもどかしい。

ただ自分からメールするのは、出来ない。自分の幼いプライドが邪魔をしているのだ。

「最近元気ないね」とか送れたら良いのに、本文を書いても送信すると言うボタンをどうしても押せない。指先が震えて。

こんなにも自分がちっぽけで幼稚な人間だとは思わなかった。

幹也が離れてから、僕には友達が出来た。皮肉な事だ。今までは幹也のせいで誰一人としていなかったのに。

そんな人たちが近づいていくと同時に、幹也の心も何もかもが離れていく。

「南く今日、カラオケいかね？」

「あっ、うん・・・」

「オッケー。んじゃ今日の五時、駅前のカラオケな」

友達是他にもカラオケに行く人を片っ端から声をかけている、今日は大人数になりそうだった。

そう考えると幹也の隣はあまりにも気楽だった。

幹也がいれば、周りから眺めるだけのクラスメートばかりで、少しでも近づけば幹也が先に牽制をかけていた事は知っていた。

窓から見える眩しく、いつもより輝いて見える夕日に一瞬だけ僕は目を細めて、教室から出て行った。

「はい、次私行きますー！」

クラスのマドンナが手を挙げて笑いながら歌を歌い始める。

7時、駅前のカラオケ。

ひゅーひゅーと男子の興奮した声を聞きながら僕は苦笑いを浮かべる。

カラオケに参加しなかったのはほんの数名で、30人近くのクラスメートが部屋にぎゅうぎゅう詰め状態だった。

僕は隅っこの方でミルクティーを啜りながらお世辞にも良い声とは言えない女子の歌を耳に入れていく。

「南、歌わねえの？」

友達が声をかけて来て、マイクを手渡す。歌う気分でもなく断ろうとしたが、隙も与えずその男は女子の声を中断させて叫んだ。

「次は、南が歌うぜー！」

「んじゃ、俺も一緒に歌うぜ」

俺も俺も、とマイクを持たないクラスメートまでそろって全員で大合唱。

合掌コンクールでもないのに、皆が皆大きな口を開けて声を揃えて歌う。あまりにも見慣れない光景に驚きながらも僕はつつい笑みをこぼした。

「なあ、次俺行きますー！」

「はは、勝手に逝ってろや！」

「ひでー！」

大合唱が終われば次々とクラスメートは挙手して歌を入れ始める。唐突に僕はミルクティーの飲み過ぎで、トイレに行きたくなる。込み合った場所を押しつぶされながらも扉に向かう。

開いたところで、右側にトイレがあるのだ。

「み、きや・・・？」

カラオケの入り口がわに、何故か吸い寄せられる様に目線を動かした。

その先には入り口。あの時と同じ女子と共に立つ幹也の姿があった。幹也は呼ばれたからか、こちらを振り返った。僕の声が届いたのかと鼓動が激しく音をかき鳴らす。

けど振り返った幹也の瞳は驚く事も、喜ぶ事もなく、ただ虚無を思わせていて何もない。何も、ない。

「みきや・・・！！」

女子に引っ張られて、連れて行かれる幹也の姿にハッとして叫んだ。それでも遠くなる幹也の後ろ姿。

慌てて走って、それでも距離は全く短くならない。むしろ遠くなり、その背中小さくなって消えていく。

見なくなる。嫌だ、嫌だ。

「みきや・・・みきやああ！」

すなおになれない。4

こんなにも僕がお前を呼んでいるのに、何故お前は僕を見ない。
涙で視界が歪み、何人もの人間とぶつかる。小さく謝罪を述べて走り去る。

苦しい、喉が圧迫されて泣き声は引きつっているかもしれない。

幹也が見えなくなったとき、僕は足の力が急に抜ける。駅前のすぐ横、狭い路地に向かってべたんと座り込む。冷たいアスファルトに尻を付けて膝を抱える。

こんなとき小説ならば、僕が乙女な主人公だったらきっと幹也に縋り付いた泣き叫んで引き止めていただろう。そしてきっとハッピーエンド。

しかし、そうならないのは、また小さな僕の意地が邪魔をするんだ。
(みきやの、ばか……！)

何が悪かったのかわからない。ありすぎて分からないのかもしれない。

僕の態度が悪かったのか、僕が素っ気なかったのは今に始まった事じゃないだろう。

僕が待ち合わせすっぱかしたからか、いや違う。アレはどう考えたって幹也が悪いんじゃないか。

「みきやの、ばか……やろう……！」

何度も冷たいアスファルトに拳を叩き付けて、唇を噛み締める。

「僕の……傍にいて、約束……してたじゃないか！」

想いが、唇から次々と溢れ出して霧散していく。

涙がぼろぼろと頬を滑り落ちて、地面を濡らす。糸が切れたのか、あふれていく涙を止める術を僕は知らない。

「一生、好きだって……言ったのに……！」

昔の、幹也と僕の思い出。僕たちだけの思い出の中はあまりにも鮮やかな色と輝きを放っている。

柔らかく幼い口調で、けれどはっきり幹也は僕に言った。

「ーずっと、すき。すきだから、みなみ。」

そう言っではじめて幹也から僕に抱きついて来たじゃないか。

「あの言葉は嘘だったのか・・・!?」

なんで、僕だけを好きだと言ったのに。全部嘘じゃないか。

様々なものに邪魔されて、見えなくなっていた胸の中の感情が吐露する事によってだんだんと姿を現していく。

目を逸らしてたくさんものを積み重ねて、見ない様にしていたものだったのかもしれない。

認める事が怖かったのだ。

想いが、溢れる。

「僕は・・・僕が・・・！ 幹也が、好きなんだよお！」

鼻水で涙で、様々なものでぐちゃぐちゃすぎる。

もっともっと言葉を、幹也への想いを口にしなくちゃ、たまってたまって一生胸の中に残るんだ。

なのにもう言えなくなった、今度は言うのが怖いんじゃない。言えなくなったのだ。

頬に触れる手が、唇に触れる温かな温もりが僕の言葉も心も、想いも強引に奪い去ったのだから。

「ん、んん！」

久しぶりに正面で見る憎らしいまでの綺麗な顔には疲労の色が見えた。

夢、かと思った。涙のせいでぼんやりしていて、望みすぎたの幻想かと思った。

みきや、と呼んだつもりが音も息も飲まれていく。

深い深い口づけから、幹也の僕への想いを感じると考えても良いのだろうか。

舌が僕の舌へと絡まり、吸い上げ執拗に弄ぶ。僕はそれに夢中になっつかぶりつく。

「み、んっ・・・」

あまりに長い口づけに意識が遠くなりそうになるのだ。幹也が消えてしまいそうだ。

唇を離すのも惜しくて、けれど幹也が見えなくなるのは怖くて。思いつきり胸を押せば、幹也の拘束は緩んだ。

「みきやつ」

「みなみ、みなみみなみ．．．ごめんね、みなみ、好き」

「み、きや．．．？」

「ずっとごめん、ごめん。南が好きすぎてね、でも南俺に冷たいじやん。だから賭けたんだよ。南がもし俺を追いかけて来なかったら、南の勝ち。南が俺を追いかけて来たら、俺の勝ち。南は一生俺のモノ」

少し低い位置にある僕の顔を幹也は幸せそうに眺めている。

ああ、本物だ。

「南苦しかった？　俺がいなくて苦しかったでしょ。でもさ俺のが苦しかった。大好きで大好きで仕方のない南、無視するの苦しかった。泣きそうなの見て抱きしめたかったし、南って呼びたかったよ。もう何度も南が前に送って来たメール見ながらずーっと南、南って馬鹿みたいに呼んでたんだよ」

唇を尖らせて、恨めしそうにこちらを見る幹也の顔をボッコボコに殴ってやりたい。綺麗な顔がやっぱり憎らしい。

僕も苦しかったに決まってるじゃないか。辛かった。幹也がいないという事実が恐ろしかった。

僕の顔がそんな風にでも歪んだのか、幹也は大きな腕を伸ばして僕の背中へと巻き付ける。触れる温もりが温かすぎる。

何とも愛おしい。

「幹也．．．」

「ん、なに？」

「ごめん」

「そっか、俺もご免。南試しちゃってさ」

「みきや．．．僕．．．．．」

幹也が優しく笑いながら、首を傾げている。きっと幹也はもう答えを知っているはずだ、僕の答えを。

目を閉ざし深呼吸をする。まるで曇った空が一瞬で晴れていく様だ。もう苦しくない、辛くない、胸に痛みもない。今なら小さなプライドを捨てて幹也に言う事が出来る。

「すき、幹也が好き」

言葉はまた、飲み込まれた。

—END—

すなおになれない。 4（後書き）

読んでくださって有難うございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0886z/>

あいたい。

2011年12月3日11時56分発行